



会議報告

あなたはこの主張に答えられますか？ 原子力委員会市民参加懇談会 in 札幌開催を機に

原子力委員会市民参加懇談会コメンター 小川 順子
(原子力学会理事, WIN-Global/Japan 会長, 原電)

日本原子力学会「秋の大会」が行われた札幌で、9月29日、原子力委員会市民参加懇談会 in 札幌が開催された。今回は、時と場所が大会と近かったため、多くの原子力学会員が市民参加懇談会にも足を運んでくださった。この機会に学会誌では初めて、市民参加懇談会活動の意義と活動を記し、会員の方々へのお願いをさせていただきたいと思う。

市民参加懇談会とは

皆さんは、原子力委員会の中に、市民参加懇談会(以下、「市民懇」と略す)という機能があることをご存知だろうか。市民懇は、市民の声を原子力政策に反映するために、原子力委員会が主催する、「市民のご意見を聴く場」があり、数ヶ月に1度全国各地で開催される。現在、コメンター会議は、木元教子原子力委員(当時)を座長として、ジャーナリスト、女性団体リーダー、評論家、大学教授など15名で構成されている。筆者は、市民懇発足当時(平成13年)から、WIN-Japan 会長の立場

でコメンターとして市民懇に関わってきた。コメンター会議では、市民懇で出た意見をどのように政策に反映するかをはじめ、各地の市民懇の総括や、次の市民懇の場所・内容などの企画が話し合われる。会議には、原子力委員長はじめ原子力委員がオブザーバとして出席されるので、市民懇は、原子力委員の共通認識の元に運営されているといえる。

市民懇誕生のきっかけは、新潟県刈羽村のプルサーマルに関する住民投票だったと思う。木元座長は、住民投票でプルサーマルが否決されたという現実を前に、「立場は違っても、日本のあり方、国民はどんな生活を望むのか、その上で、エネルギーの供給はどうあったらいいのか、そういうことを現実的に冷静に話し合う場が、これからは必要である。また情報提供のあり方はどうあるべきかについても国民の意見を聴きながらすすめるべき。」と、市民懇の設立を決意されたようだ。

これまでの市民参加懇談会の活動

平成14年1月に刈羽村で初めての市民懇を行って以来、今回の札幌まで13回の市民懇が開催された。開催地は、消費地と、原子力施設の立地県から東京、福島、埼玉、敦賀、福岡などで行った。テーマは、「知りたい情報は届いていますか」をベースに、「この夏の電力危機はなんだったのか」、「原子力長期計画への意見を述べていただく」や「放射線利用」など、開催時期と場所に相応しいものを設定し、開催地の皆さんに関心をもって参加していただけるようにしてきた。

プログラムは、パネリストによる話題提供と参加者との意見交換という2部形式をとったり、パネルディスカッションにしたり、これも開催地の実情を踏まえて実施してきた。事前のご意見は毎回いただくようにし、時にはそのご意見に答えるという時間も設けてきた。

参加者は、200名前後の規模で、原子力関係者が多いことは否めないが、女性や若い人で、エネルギーや環境問



市民参加懇談会 in 札幌会場風景

題に関心のある層の参加も3割程度を占めている。

参加者アンケートによると、毎回9割近くが、大変満足、大体満足と答えている一方、不満足の原因の多くが、「専門用語が多くて、難しかった」としており、ここでも、わかりやすい言葉による情報提供の必要性を思い知らされる。

市民参加懇談会 in 札幌

札幌においては、「原子力—知りたい情報は届いていますか」をテーマに、1部：パネルディスカッション、2部：会場参加者との質疑応答、意見交換のプログラムを組んだ。パネリストに下記の3名、司会・進行は、コアメンバーでもある科学ジャーナリストの中村浩美氏が行った。そのほか、木元座長と7名のコアメンバーがセンターテーブルでの議論に加わった。参加者は約120名、40代、50代がおよそ半数で、全体の約2割が女性であった。

【パネリスト】

大友詔雄(おおとも のりお)氏

特定非営利活動法人

北海道新エネルギー普及促進協会理事
 会長

佐藤正知(さとう せいち)氏

北海道大学大学院工学研究科教授

佐藤のりゆき(さとう のりゆき)氏

テレビキャスター

ここで、3名のパネリストの発言の要旨を見てみよう。

【佐藤のりゆき氏】(マスコミの世界で感じるエネルギー、原子力問題を発言)

●今の日本の課題であるエネルギー、食料問題は北海道が担う。●原子力政策大綱で、核燃料サイクルの堅持、原子力発電の割合を30ないし40%にする、高速増殖炉の導入を目指すという国の方針が示されたことは重要。●原子力がなくなると江戸時代に戻るというシミュレーションがある。●原子力の広報は、いままでの「原子力は

安全」というメッセージから、大変危険だが人間の知恵で安全に運転できるというメッセージにするべき。●賛成、反対の立場で論じるのではなく、どうやったら豊かな社会を持続できるかという話し合いをすべき。

【大友詔雄氏】(自然エネルギー中心の新エネルギーを使い、原子力はできる限り使うべきではないという立場)

●原子力が専門であったが勉強すればするほど原子力は使えない技術と思った。●原子力は、実規模の放射線を伴う事故の実証ができないので安全性の評価ができない。ゆえに使えない技術である。●蓄積された核廃棄物を万年のオーダーで管理できるかという実証性もない。●人間の食料が放射能汚染される危険性もある。●100%木質繊維の断熱材を日本中の戸建て住宅で使えば原子力発電1基分を節約できる。●原子力がなくても、今なら化石燃料で代替できるし、将来的には、自然エネルギーで全く問題ない。

【佐藤正知氏】(原子力は現在の日本の生活を支えている。エネルギーの選択肢は原子力を抜きにしては考えられないという立場)

●不透明な時代に生き残るには、多様な選択肢をもたなければならない。●日本は面積が狭く、自然エネルギーは限定的である。●将来の変化に柔軟に対応できるようなエネルギーシステムを考えるべき。

市民参加懇談会のパネリストは、原子力に慎重の立場の人、推進の立場の人、メディア関係者、地元からの意見を言える人など、バランスを取っている。いろいろな立場の人をお願いしている。

今回、明確に原子力に反対を表明している人は、大友氏のみだったため、異論を持つコアメンバーやパネリストからの質問や意見が大友氏に集中してしまった。さらに、大友氏が以前、原子力の専門家であったということもあり、原子力に関する安全実証性につい

て、かなり突っ込んだ議論をされたため、内容が専門用語が多い技術的な話になり、一般の参加者には、理解しにくい話もあった。そのためか、あるいは原子力には関心が薄いといわれる札幌の市民性からか、会場からの意見が少なかったことは、残念であった。

しかし、アンケートに見る参加者からの感想では、「熱い討論で引き込まれた」、「様々な角度からの意見を聴けて非常に勉強になった」という言葉に代表されるように、評価はかなり高かった。今回の開催により、日頃、原子力はほとんど話題にならないといわれている札幌市民の皆様にも、考えていただけるきっかけが提供できたのではないかと思う。

もし原子力学会員のあなたがこの場にいたら…

今回、パネリストの主張に対し、「それはちょっと違うのではないか」と思いつつ、何も言えない自分に、我ながら失望した。発言者は、手持ちデータを元に、主張している…そう考えると、大勢の前で、専門外のことを発言するのは、はばかられる雰囲気がある。そういう時に思う。いろいろな専門分野に多くの人材を配する原子力学会の研究者や技術者が、原子力学会の一員という立場で、発言者と冷静な議論をしていただけたらと。

原子力学会として社会にどのように貢献していくべきか、という議論がされている昨今、原子力委員会唯一の、市民の意見を聴く常設の場である市民参加懇談会で、事実誤認の意見や、誤解に基づいた意見などが出たら、専門家の立場で、会場の方にバランスのとれた情報を提供していただきたい。予定された発言者としてではなく、会場から生の意見を言うていただくことが説得力となる。それには、まず、近くで市民参加懇談会が開かれる場合は、ぜひ足を運んでください。

(2006年 11月13日 記)